
留学生らの夕食

鹿雑色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

留学生らの夕食

【Nコード】

N5983V

【作者名】

鹿薙色

【あらすじ】

彼女は、黒髪のショートカットで清純的な雰囲気的女性、という風な女性だった。

今日、ティナ・デリング教授の講義があった。いつもどおり、バイオロジーについての講義だ。日本から持ってきたキャンパスノートが余っていたので、今回はそれを使って教授が話す重要事項を書き留めた。

大教室の収容人数は三百人強を誇るが、しかし、他の大教室は最大で六百人強を超えるところもあり、中程度の大きさと言わざるを得なかった。そんな教室の最後列に座った私は、その中程度の大きさの空間に響く、デリング教授の発言に耳を傾け、後列用に設けられたモニター画面を注視する。

と、その時、後ろにあった扉が開いた音がして、誰かが入ってきたことに気付いた。しかし私は依然としてモニターを注視し、教授の口から発せられる次の言葉を注意して聞いていた。であるのにも関わらず、その人影が私に言った。

「Mind if I sit here?」

最初は私に言っているのではないと思っていた。だが「Excuse me」と、肩を叩かれてやっと自分に言っていることに気付くと、私は「Sure. Not at all」と、相手の顔も見ずに返しておいた。これで再び集中して講義が聞けると思ったが、それは間違いだったとすぐに気付かされた。

横に座ったのは女性だった。しかも彼女は日本人。私を日本人だと認識すると、尚話しかけてくるのだった。「あなたも日本人だったの?」なんだ、英語で話さなくてもよかったんじゃない」

しかし、彼女は意外に美人だった。黒髪にショートカットで清純的な雰囲気的女性、という風な人であった。

一瞥して不覚に思ったが、既に後の祭り。教授の重要な説明を聞き逃してしまった。

デリング教授の講義には特徴があった。それは、重要な事項はブ

ラックボードに書かないが、知っていても知らなくてもいい事柄だけそこに書く、というものだった。最初に知った時は意味不明だと思ったが、でも、彼女の講義のおかげで人の話をしっかりとよく聞く力が養われて、私の彼女に対する株は、一番信頼できる教授というまで上昇していたのだった。

それなのに自分が一番信頼する人の話を聞き逃すとは。

黒髪の彼女は、依然として私を見ていた。そしてこう言う。

「もしかして中国人とか？ Can you speak Japanese？」

「いや、日本人だから」

仕方なく私は応えた。

私には留学を共にした親友がいた。彼の名は、神戸寛という。私と同大学で語学を専門とする学科で学び、授業以外の時は殆ど彼と行動を共にしていた。

そんな頃、神戸は私に報告してきた。

「俺、彼女できたんだよ。同じ日本人の子でさ……」彼は醜男というわけではなかったが、何故かそれほど女運がなく、今の今まで十九年間、彼女を作ったことがなかったのだ。

そんな神戸が大いに嬉しそうに喋る姿を前にして、私は話の腰を折ることなど出来ず、彼の話はその後一時間以上にも続くのだった。

出会ってから一ヶ月。私と彼女がどんどん仲良くなっていくにつれて、私は改心した。彼女はただの美人というだけの女性ではなく、あらゆる意味で人を惹き付ける魅力を持っている、不思議な女性だということを知ることになった。殆どの授業では、二人は隣同士に座り、時にはデリング教授の話も聞かずに三十分くらい喋り込んで、一回だけ教授の注意を受けたこともあった。それ以外でも昼食を共にしたり、プライベートでも彼女を含めた留学生達が集まって旅行に行ったりもした。しかしそれでも、彼女は恋人という

のではなく、親友という立場に置くに相応しい存在になっていた。

たしかに私は彼女を恋人という存在にしたいと思った時もあったが、私も神戸と同じで今の十九歳まで誰かと付き合うなんてことをしたことがなかったのだ。それ故に私の中には恋人が欲しいと思う心とそれを躊躇する心が二律背反し、その結果として彼女を私の「親友」というポジションに置き、この頭痛に苛まれるようなアンビバレンスから脱出しようとしたのだ。

その成果はあったように思われる。何故なら、前よりも少し気が楽になったように感じられたからだ。

だからといって、彼女への思いが根絶したわけではなかったが、隣で楽しそうに笑っている彼女の笑顔を見れば、私の結論を見直して見ても納得がいくのであった。

驚愕する話を聞いた。彼女の口から聞いた話だ。

「来週の金曜は駄目。彼氏とデートだから」

私が彼女に留学生同士で行くアイスランド旅行の参加を尋ねた時、返ってきた言葉がそれだった。

「彼氏とデートって、彼氏なんかいたのか」

意外、ではなかった。妥当だと思った。

今、再び思えばたしかに彼女は恋人が居てもおかしくないくらい美人だし、私もその美しさに惚れていた。

私が彼女への思いを制御すべく苦悩した日々の間に彼氏を作り、二人で色々なことをしたのだろうと、後の祭りだが、すこし悔しくも掌を握りしめて、その反面、一段と気が楽になった気がした。

私が悩んでいた理由は私の経験上、彼女に自分の思いを伝えようとする意志が固まりきらず、しかし、早くその思いを伝えるべきだという対照的な思考が二律背反していたためである。だがそれらは、その板挟み状態から生み出された第三の中立的思考によって脱却できた。つまりそれが彼女を「親友」として考えるということなのだ。だから彼女から彼氏がいることを聞いたとき、「親友」として安

定していた気持ちの中に対立していた、思いを伝えようとする意思の方が悔しがり、それと反対の意思が安堵したのだった。

結果的に私は彼女を諦めることができた。

やはり彼女は、私にとっての「親友」というだけの存在でしかなかったのだ。

恋人同士というのは、初めからあり得ない話だったのかもしれない。

しかし後日、私は彼女から興味深い話を聞いた。

「私ね、彼氏と別れたのよ。だから、この前の、たしか今週の金曜のアイスランド旅行？ 行きたいんだけど」

デートをする約束をしていたというのに、この数日で何があったのか少し気になったが、泰然として私は彼女に返した。

「ああ、丁度良かった。君の前に行くのを中止した奴が居たんだ。

計画については今度メールするよ」

「ありがと。でさ、今日夜ご飯食べに行かない？ 今日、暇なんだ」
そしてまさか、彼女から私を誘ってくるという、思ってもみなかった展開に私は少し歓喜し、少し驚いていた。

勿論私は、彼女の誘いに乗り、いい夜を過ごした。訳ではなく、指定された店には私達二人以外に男女三人がやって来て、いつもと同じ留学生同士の賑やかな夕食を過ごすことになった。だがそれもまあいいか、と思った。

そういえば、留学生達の夕食は、賑やかなものだった。私はそんな日常も彼女への思いの板挟みで忘れかけていたようだ。

再び訪れ実感させられたこの場の一体感は、結果的に私を納得させた。

彼女だけが際立って見えるのだ。この場、この空間の中で。

これは、やはり……。

私にも希望の光が見えた。そして、いつか彼女の肩を抱いてみた
と思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5983v/>

留学生らの夕食

2011年10月9日13時54分発行